

1 研究の内容

本テーマの研究は6年次にあたる。今年度でこのテーマでの研究を一度まとめておきたいと考えている。しかし、本校の音楽部の考えは、ニュージーランド出身のクリストファー・スモールが提唱した、「musicking」*1に賛同していくことには変わらないことを初めに伝えておきたい。

長年、本校音楽部では、スモールの考えに賛同し実践を続けてきた。どんな形であれ音楽に主体的に関わっていくことができるからだを育むことを第一に考え、実践をしている。子ども一人ひとりが「音楽すること」を実感し、自らが音楽と向き合いたいと思えるような環境づくり（場の設定や教材の工夫）が大切であることも明らかになってきたところである。その特徴のひとつといえる活動が、4年生から継続して設定している「MUSIC MAP」である。この時間においての子どもたちの姿からは実にたくさんの学びをあむ姿が見てとれる。同時に、やらさせる音楽ではなく、自らがやる音楽の時間が保証されている中で、自分なりに活動計画をし、自分や他者の音楽に浸る中で、自分と音楽との向き合い方を更新し続けている子どもたちの姿が多く見られている。

今年度の実践も感染症対策を講じた中での活動ではあったが、徐々に活動の幅を広げることができた。そこで、研究最終年度として、今まで実践してきた中で、子どもたちの音楽と向き合う姿の変容を改めて分析し直す中で、この実践の価値付けができたかと考えている。これは、昨年度課題としてあげていたことでもある。そして今年度も、子どもたちの音楽に関わる姿勢や変容から省察するだけでなく、音楽をあみ直していく過程こそがメタ認知スキルや社会情動的スキルを育めると捉え、本研究を進めている。以下は、「musicking」と「ミュージックマップ」についてである。参照されたい。

○「musicking」：スモールは、このミュージッキングを、音楽する（to music）という動詞の、動名詞形であると定義している。「音楽する」とは、どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり、これには演奏することも聴くことも、リハーサルや練習も、パフォーマンスのための素材を提供すること（つまり作曲）も、ダンスも含まれる。とスモールは言う。まとめると、各自の立場を問わずに音楽的なパフォーマンスに加わるすべてのものが、「音楽すること」なのである。チケットの売り子や、掃除係など、裏方まで、その場に集うすべてのものが音楽に参加し、音楽を共有し、音楽に貢献しているという考えである。

○「ミュージックマップ」自分でやりたい音楽に向き合う時間

4年生から6年生では、自分たちで音楽活動を創りあげる「MUSIC MAP」の時間がある。この時間は、自分（たち）の音楽を追求する時間と言ってもよい。自分の音楽活動をデザインし、マップを見直す中で、修正をかけることもあれば、さらに深い学びにつながることもある。さらには一人ひとりのマップが、大きな学習材に変化することもあるのだ。1時間の中の学びを、少しずつ形を変えながら次時に活かして活動していることもわかっている。4・5年生では、様々な音や楽器に触れる機会を多く設ける。その中で、自らが音楽と向き合い、試しながら楽しむ姿が多く、次第に自分のこだわりを見つけしていく。6年生になると、楽器の選択の幅も広がり、ドラムやギター、ベースなどに興味を持ち始める子が多数出でてくる。たくさんの選択肢の中から、自らが音楽と向き合い、試行錯誤しながら進めていく姿が多く見られる。次第に自分の追求すべきものと出会い、没頭する姿が多い。また仲間とともに奏でる喜びや、難しさを、その時その場にいる仲間とともに共有し、さらなる活動へとつなげていく姿もある。

mapには地図、天体図、星座図、図解、図表といった様々な意味を含んでいる。ミュージックマップを仮に音楽図とするならば、この時間は子ども自身が自分の音楽史を創っていく大切な時間と言い換えることができると思う。

2 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

(1) からだをつかって音楽する（低学年）

低学年では、からだ全体で活動することを大切にしている。あそぶという活動を通して、様々なことを学んでいく。低学年の時に、からだを通して経験していると、高学年においての多様な音楽を受け入れられたり、自分との異なりを受け入れたりと、音楽そのものを柔軟に受け入れることが出来るからだに育つのである。

①自分で選んだ曲をみんなで歌う活動（リクエスト）

授業の始まりは、1グループ（4人）それぞれの子が歌集「歌はともだち」（教育芸術社）の中から歌いたい曲を選び、選んだ理由を発表し、クラスみんなで歌う。子どもたちは、自分の順番が来る日を楽しみに待っている。そして、「今日は、どんな曲が出るのかな。」「多分あの子だから、あの曲だよ。」「やっぱりね。」など、子ども一人ひとりがこの活動の中で、思いを持って参加している姿が多くみられている。活動を重ねるにつれ、その子らしさや選んだ背景までも感じ取ることができるようだ。毎回こだわりを持って曲を選ぶ子もいる。それををわかっている仲間もいる。自分で選ぶという行為には、様々なことが関係していることがみてとれる一場面である。その子自身を受け入れられる関係性が出来ていると言ってもよいだろう。もちろん初めて出会う曲もある。そのような時、友だちの声を聴いて真似たり、楽譜を一生懸命見つめ、時には指で歌集をなぞりながら歌ったりする姿がある。仲間がいるからこそ、成り立つ学びと言えよう。

②あそびを通して関係性が育まれる（わらべうたあそびを中心として）

入学して間もない時期の活動では、初めて出会う仲間と、手を取り合い、楽しそうにあそぶ姿もある一方で、新しい環境への不安を顔に出す子も少なくない。いざ一緒にあそび始めると、手をつなぐ安心感もあるのか、すぐに活動に参加できる。仲間とともに、声を合わせ、息を合わせ、うまくあそびが成立したとき、子どもの表情は非常に柔らかく、心地よさがみてとれる。子どもたちにとっては、わらべうたあそびだけがあそびではない。手拍子でのリズム学習や、オスティナートをつけて歌うこと等々、すべての活動が子どもにとってはあそびとしてからだに入っている。

わらべうたあそびでは、クラス全体であそべるものから始め、徐々にグループでのあそびや少人数のあそび、人当てのあそびも取り入れていく。活動を重ねるなかで、息があわなかつたり、ルールを守ることができなかつたりなど、当然もめ事も頻発するが、そのときの子どもたちの関わり合いこそが大切であると考え活動を見守っている。そして、そのような営みの中で葛藤を覚え、折り合いをつけることを学んでいくのである。他者がいることを意識する上では、大切な経験と言えるだろう。

2年生でもわらべうたあそびは継続している。2年生の2学期頃になると、自分たちであそびを変えて楽しむ姿も出てくる。わらべうたあそびは伝承あそびである。時に、子どもたちは、言葉を変えてあそんだり、フレーズを増やしてあそんだりもしている。現在を生きる子どもたちにあったあそびのあり方も見えてきている。時代を超えた伝承あそびとして、変化を楽しみながら活動させたいと考える。

(2) ミュージックマップの時間における学びあい

昨年度も次のようなことを紹介しているが、引き続きここに記しておきたい。

プロのジャズベーシストである立花氏は、演奏にうまい下手はない、「音楽の時間」で重要なのはコミュニケーションであるという。また、浮々谷は精神医療を専門とする北海道浦河町の浦河ひがし町診療所で行われている「音楽の時間（後のPPE）」に年3回ほど参加し研究を重ねているが、その中で次のように述べている。多くのメンバーが「落ち着いてできればいい、いつも通りできればいい」というように、「今以上うまくしようとは思わない、楽しければいい」ということでほぼ一致している。仮に「うまくなること」を目指すと、楽器の扱いや演奏の技術のハードルが高くなり、うまい人に同調すべきであるという暗黙の圧力も生まれて参加者の「日常」から切り離された活動なりかねない。*2

学校における音楽も同じだと考えてよいと捉えている。自分から向き合っただけこそ音楽のもつ本当の楽しさを感じられるのではないか。このような場の設定は、教師の役割のひとつでもある。子どもが没頭

できゆったりと自分の音楽に浸れる時間こそ、学校で音楽を学習する意味だと捉えた上で、子どもたちの様子を紹介したい。

①YOASOBI にハマっている男子グループ

昨年度は「怪物」をこれでもかと言うほど繰り返し演奏していた子が多いグループである。今年度も引き続き YOASOBI シリーズの演奏に没頭していた。マリンバや鉄琴、ピアノ、ドラムという構成で演奏していた。ドラム以外は、メロディパートを皆で演奏し、ユニゾンで演奏することを楽しんでた。そこに、リズムパートであるドラムが加わった。分からないことがあると仲間に助けを求め、見よう見まねで自分のものへとしていく姿がある。次第に仲間との息もあい、迫力が出てきた。あるとき、なにか物足りなさそうな表情を浮かべていた I。問うてみると、「なんか足りないんだよなー。」とつぶやいた。具体的に聞いてみると、イメージしているものがあるようだが、上手く言語表現に変換できないようであった。ユニゾンでの演奏であったためベース音をはじめ、他の声部を加えたいように教師は捉え、一緒に演奏することでこのように変化させることができる、ということを示して提示してみた。その提示を自分たちの音楽に取り入れるかは本人たちの意思決定に委ねられるが、その後の活動からはメロディーだけで無く音楽を構成している違う要素にも着目し始めた様子が伺えた。そして、回を重ねるごとにこだわりや面白さを見つけながら活動していったのである。まさに「好き」とはこのような没頭し続ける姿であると言い換えることができるのではないかと。

②自分たちで考えつくっていく（選曲～楽器～分担～工夫～批評）

クリスマスシーズンが近づき、「きよしこの夜」に取り組み始めた S たち。「クリスマス＝ハンドベル＋ベル」というイメージを持っている子が多かった。その中で N はその考えに「？」を唱えた。「もちろんきれいな音でみんな演奏するのはいいと思うけど…。私は違う音色がいいな。」それを聞いた他の子は N の思いを受けとめ「音色」についてともに考え始めた。この営みで、自分だけでは気づくことができなかった視点が、新たな自分の視点として習得されていくことがみてとれる。

自分たちでやりたいものを見つけ、考え、表現していく過程では、一人ひとりが持っている音楽観から触発されている姿も少なくない。自分はいいなと思うことも他者からしてみれば逆のこともたくさんある。集団として音楽することの中に様々な学びが交錯していくのである。

③音楽への様々なアプローチ～ICT 機器を活用して～

五線譜が全く読めなくても、鍵盤楽器を演奏することは出来るということを感じさせてくれた一つの事例である。インターネット上には、様々な楽曲のシンセシア動画がアップロードされている。T はそれらをうまく活用し、自分のやってみたい音楽に取り組み続けていた。キーボードの譜面立てにタブレット端末を設置し、落ちてくるバーに合わせて打鍵していく。時に再生速度を調節しながら、少しずつ習得している。メロディやリズムは、頭の中に入っている。実際に楽器から出ている音とそれらを合わせていく作業をしているのであろう。自分の耳を駆使して音楽と向き合っている一事例と言えよう。ゆっくりではあるが、徐々に自分の音楽として取り入れている姿がある。音というカタチにアプローチしていくすべは多様にある。また、デジタル社会になった今に生きる子どもたちならではの音楽との向き合い方のひとつなのかもしれない。

（3）3年ぶりの全校音楽会

今年度、実に3年ぶりに大学講堂で全校音楽会を開催することができた。1・2・3年生は初めての舞台であった。そして、4年生以上も合唱や合奏といった学年で1つの音楽をつくっていくことに初挑戦したのである。午前の部は、学年ごとの発表、午後の部は5・6年の有志による発表という形で今年度の音楽会は開催された。

①最高学年としての6年生の発表

・合奏の楽譜を見た途端、「わーっ！」を通り越して固まってしまった。無理…そう思った。ただでさえリコーダーできないのに難しすぎる。よく見たら周りの友だちも同じ感じだったので少し安心した。でも、安心しているどころではない。毎日少しずつやっていたらできるようになった！うれしかった！10月に入り私の心の中では、激しい戦いが行われていた。リコーダーをやるかアコーディオンをや

るか。戦いの末、アコーディオンをやることに決めた。何しろ最後の音楽会ですから。アコーディオンは想像を遙かに超える難しさだった。左手と右手のタイミングが合わないと言えない。それから毎日音楽室に通って練習をした。例年の6年生がすごいのは、音楽室に通っていたから何だろうかなど、心の隅で思った。

・音楽会に向けて練習してみて思ったことは、ずばり「むずかしい!」と「大変!」です。他の学年よりも合唱が多いことや合奏のリコーダーで言えば、たくさんの指を動かさなければいけなくて、指が回らない!と一度諦めかけていました。でも、みんながたくさん励ましてくれたおかげで、私もここまで来れました。本当に感謝しかありません。

これらは、音楽会後の子どもたちの振り返り(一部)である。最高学年としての意気込みと同時にプレッシャーもあったようだ。102名一人ひとりが努力し、互いの音を聴きながら本番に向け取り組んでいた様子が印象的であった。練習過程では、それぞれ壁にぶち当たることも多々あったであろう。そんなとき、仲間とともに頑張った経験や、工夫し合ったことは自分自身のステップアップにつながっていると捉えている。大集団で創りあげる音楽だからこそ経験できたことが多い。それを自分の音楽に活かしていく姿を期待している。

②授業の延長線上にある午後の発表

学年発表と並行して準備が進められていた午後の部。演奏する曲やメンバー、使用楽器も自分たちで考え、ベースとしての楽譜はあったが、どのような構成(アレンジ)にしていくのかは子どもたちに委ねた。練習をしていく過程で、「ここはこうしようか。」「終わらせ方はどうしよう。」「もっとこうした方が。」など、たくさんの考えを出し合う姿があった。また、教師もこんなやり方もあるよなど、適度な介入をした。自分たちの思い描く音楽とどう関わって学びを構成していくのか。その営みが大切なのだと言えるだろう。それぞれのグループの取り組みや本番までの活動の様子、ひとつの作品を創りあげていく過程から見えてきた学びのスパイラル、客観的に自分たちの演奏をみて、気がついたことやこれから活かそうなど。約3ヶ月の取り組みの中で、自分たちの音楽を更新し続けてきた様子が伺える。あるときは自分と向き合い、あるときは他者を意識し、あるときは聴衆を意識しながら音楽活動を創りあげてきた。まさに、学びの構築過程に音楽ならではの自分をメタ的に捉えることができているシーンがある。これらの経験は、学校音楽が担う重要な資質能力の育成につながっていくと信じている。

3 今後に向けて

子どもたちがやりたい音楽とは何だろうと、最近よく考えている。異なる背景を持った個が同じ空間で集団として音楽を営むこと、これこそが学校音楽でしか経験することのできない時間なのであろう。一人ひとりの音楽が存在し、繰り返される音楽活動の中で、異なった表現が行き交う空間。だからこそ触発されながらそのカタチを大きくしていく。最終年度にあたる「“音楽すること”からひろがる・深まる」という研究テーマ。①「あそぶ・選択する」ことの中から育まれること②様々な楽器や音に出会うことで、個の音楽観の変容を追うこと③自分の音楽とは何か、考え表してみることの3点を、子どもの活動を通して多角的に分析してきた。その中で、自分で活動を創っていく時間をたっぷり設定する中で、子どもたちの音楽的深まりやだけでなくひろがりも期待できることは、明らかになったと言える。自らが自分の意思で音楽と向き合っている姿や、そのような営みの中で、自分がやりたい音楽を見つけ、さらに興味を持つことから深まり、ひろがっていくのである。まずは自分が音楽することを楽しむ。時に仲間とともに創りあげる過程を楽しんだり、悩んだりする中で新しい発見をしていく。その発見を次に活かしていく。このような学びのサイクルこそ、学校音楽における大切な学びであると言いたい。6年間の研究成果を子どもたちの変容から意味づけることができたことと捉える。そして、この成果を更なる研究へとつなげていきたいと考えている。(下田・町田)

*1クリストファー・スモール、野澤豊一+西島千尋訳(2011)『ミュージッキング』水声社

*2野澤豊一・川瀬慈編著(2021)『音楽の未明からの思考 ミュージッキングを超えて』アルテスパブリッシング,p60,63